

「やさしい信号機」 11月号 ～「こころの扉」を少し開いてみませんか～

横断歩道を渡る際、歩行者用信号が点滅しはじめ、慌てて走ったという経験はないでしょうか。ある日の新聞に、身体障がい者が横断するには今の信号では間に合わないという投書をきっかけに、一部交差点の歩行者用の青信号が5秒延長されたという記事が掲載されていました。記事の終わりに「たった5秒のことかもしれないが、高齢者や障がいのある人たちにとって少しやさしい信号機となりました」と書かれていました。延長された5秒により、高齢者や障がいのある人たちに限らず、妊娠中の女性や小さな子どもを連れた人など、あらゆる人たちに優しい信号機となったことでしょう。これは、障がいの者の立場に立って考えたことでバリアに気付き、行動したことでバリアの解消につなが

がった話です。

私たちの周りでは、障がいのある人が使いやすいようにトイシヤ点（線）状ブロック、スロープなど目に見えるバリアフリー化が進んできました。しかし、バリアフリーの設備があっても、障がいのある人に対する偏見や差別、無関心などがバリアをつくってしまうことがあります。障がいは種類や程度によってさまざま、生活の中で困ること、不便なこともそれぞれ違います。障がいの特性を理解して、その人の目線になって周りをしてみると、何がバリアになっているのかが見えてくるのではないのでしょうか。無関心のままでは、バリアは見えてきません。

12月3日から障害者週間、12月4日から人権週間が始まります。まず、自分の周りにはどのようなバリアを感じている人がいるのか想像し

てみましょう。想像力を働かせることで見えなかったものが見え、相手への思いやりの気持ちが生まれるはず。共生社会は、私たちの理解と行動によって築かれていくのだと思います。

